『本朝法華験記』の比較文学研究
――表現の和化を中心に
（要旨）

馬　　駿*

一、はじめに

本報告は験記における表現の和化問題の展開に先立ち、比較文学の立場から、実証的な方法で験記と『法華経』及び関連の仏典との出典問題を明らかにしたい。

二、験記と『法華経』の経文

験記では『法華経』の経文の引用法は直接と間接の二つがある。経文を直接に引用するに、七通りの文型を用いる。うち、経文引用の際、異文の現象が生じるが、それを初めて指摘して版本学の解釈を試みる。直接の引用法より間接の引用法に関する研究のほうが立ち遅れている。験記では『法華経』の用語が随所にちりばめられているが、それが数多く見逃されているからである。

三、験記と智顗説「法華三大部」

第一には、験記と法華玄義との受容関係について、第88話持経者蓮昭法師には「其病平愈、身心安楽」の文言がある。四字句「身心安楽」は法華玄義に「遇光聞法者、三途中身心安楽、人中癃残者差」と見え、妙法を聞けば、三途においても心身とも安楽で、病弱などが回復する、という。第二には、験記と法華文句との受容関係について、第24話頼真法師には「宿習猶残、余報未尽、唼唼常嚼」の記載が見られる。頼真法師のこの宿業の話は華経文句巻二に「昔五百世曾為牛王、牛若食後、恒事虚哨。余報未夷、唼唼常嚼」という憍梵波提の故事を下敷きにするものだと指摘したい。験記では法華文句を直接の出典とする故事はもう一例ある。第49話金峰山薊岳良算聖に「悲哉、智惠不及雪山寒鳥、布施不如赤目大魚」とあり、法華文句巻一「序品」に「仏昔於飢世、化為赤目大魚、閉気不喘示為死相、木工五人先斧斫魚肉」と見える。第三には、験記と『摩訶止観』との受容関係について、第29話定法寺別当法師では「形雖似僧、所行如俗。専貪瞋癡、行殺盗婬妄飲酒～五塵六欲、貪染無厭、摂受悪業、如海呑流、如火焚薪」とあり、『摩訶止観』巻一に「若其心念念専貪瞋痴、摂之不還拔之不出。～若其心念念欲多眷属、如海呑流、如火焚薪」とあるのに拠る。

四、験記と『止観輔行伝弘決』『弘賛法華伝』『法華伝記』

まず、験記と止観輔行との表現の関わりについて、第73話浄尊法師に「分段依身、必資衣食」と見え、止観輔行巻四に「内禁雖厳必資衣食」とある。次には、験記と『弘賛法華伝』との表現の関わりについて、第16話愛太子山鷲峰仁鏡聖に「欲汲谷水、瓶水自満」とあり、『弘賛法華伝』巻六に初出例として「或瓶水自満、或地恒掃浄」とある。第三には、験記と『法華伝記』との表現の関わりについて、験記の数少なからぬ表現を四字句・句式・発想といった面から、僧祥独創の用法や孤例に求めつつ、二者の並ならぬ受容関係を確実に捉えていく。

五、終わりに

表現・発想などの和化の問題に関して、第72話に現われている普賢菩薩は光空法師の代わりに腹部辺りに多くの矢が立っているとある。観音菩薩とおぼしき普賢菩薩のことを「観音化された普賢像」と呼びたい。第99話では日頃の持経者を保護・防衛・庇護にやってくるとされる阿弥陀仏の役目は明らかに普賢菩薩のそれと重なっているので「普賢化された阿弥陀仏像」と名付けたい。かような『法華経』を含め中国の僧尼伝に未見の和化表現の追及は今後の課題として展開する所存である。

＊対外経済貿易大学教授